

## 平成 19 年度科学技術振興調整費の審査経緯及び結果概要について

### (科学技術連携施策群の効果的・効率的な推進プログラム分)

平成 19 年 8 月 3 日  
文部科学省

#### 1. 審査経緯

##### (1) 公募の実施

平成 19 年度科学技術振興調整費「科学技術連携施策群の効果的・効率的な推進」プログラムについて、平成 19 年 4 月 2 日～平成 19 年 5 月 10 日の期間において、公募を実施した。

##### (2) 審査の実施

文部科学省(科学技術・学術審議会科学技術振興調整費審査部会)が審査要領を決定した上で審査を実施した。

- 1 第 2 回審査部会(平成 19 年 4 月 24 日)
  - ・審査方法、WG 構成の決定
- 2 WG における審査(5 月 10 日～6 月 23 日)
  - ・WG 委員による書面審査(1 ヶ月程度)
  - ・第 1 回 WG において書面審査をとりまとめ、ヒアリング対象課題を選定
  - ・第 2 回 WG においてヒアリング審査を実施し、採択候補課題を選定
- 3 第 3 回審査部会(7 月 4 日)
  - ・採択課題の決定
- 4 総合科学技術会議大臣・有識者議員会合(8 月 2 日)
  - ・採択課題の確認
- 5 プレスリリース・公表(8 月 3 日)

#### 2. 審査結果概要

テーマ名	応募件数	ヒアリング件数	採択件数
臨床研究・臨床への橋渡し研究	14	5	1
食料・生物生産研究	5	5	1

科学技術振興調整費「科学技術連携施策群の効果的・効率的な推進」

臨床研究 WG 委員名簿

主 査	松澤 佑次	独立行政法人科学技術振興機構科学技術連携施策群主監 住友病院 院長
	岡野 光夫	東京女子医科大学先端生命医科学研究所所長, 教授
	小安 重夫	慶應義塾大学医学部 微生物学・免疫学 教授
	後藤 俊男	アステラス製薬株式会社 執行役員 研究本部 副本部長
	田中 紘一	財団法人先端医療振興財団 先端医療センター長
	豊島 聡	独立行政法人 医薬品医療機器総合機構 審査センター長
	廣橋 説雄	国立がんセンター総長
	高野 貴子	東京家政大学 家政学部 児童学科 教授
	山本 一彦	東京大学大学院医学系研究科アレルギーリウマチ学 教授

科学技術振興調整費「科学技術連携施策群の効果的・効率的な推進」

食料・生物生産研究 WG 委員名簿

主 査	小川 奎	独立行政法人科学技術振興機構科学技術連携施策群 主監 財団法人日本植物調節剤研究協会会長
	上田 一郎	北海道大学大学院農学研究院 応用生命科学部門 教授
	加来 久敏	株式会社サカタのタネ 技術顧問 元 農林水産省生物資源研究所・上席研究官
	斎藤 雅典	独立行政法人農業環境技術研究所 研究コーディネータ (有害化学物質(無機)研究、リサーチプロジェクト運営担当)
	篠崎 一雄	独立行政法人理化学研究所・植物科学研究センター センター長
	間藤 徹	京都大学大学院農学研究科 応用生命科学専攻 植物栄養学研究室 教授
	吉田 薫	東京大学大学院農学生命科学研究科 准教授

## 「科学技術連携施策群の効果的・効率的な推進」採択課題

プログラム名：科学技術連携施策群の効果的・効率的な推進

課題分類： 若手医師の臨床研究者としての育成プログラム開発

課題番号： 783100015

課題名： 遺伝子・細胞治療に携わる臨床研究者育成

代表者名： 松井 秀樹

所属機関名：(国)岡山大学

### コメント

多数の機関が協力し、様々な段階の臨床研究を材料として若手臨床研究者を育成するとのプログラムはよく練られており、遺伝子・細胞治療の新しい発展を目指し、育成する臨床研究者像も明確に示されている。本課題終了後の継続性にも期待したい。

本課題の実施に際しては、提案内容が幅広いため、例えば3～4名のPhD取得若手医師を採用して3年間で卓越した成果を挙げることを目標とし、臨床研究から発し基礎研究と連携して新しい開発研究ができる能力の育成に重点を置いた育成プログラムとされたい。また、責任機関及び参画機関間の連携を密にするとともに、他の臨床研究拠点との協力や情報交換を積極的に行われたい。なお、本課題により構築された育成プログラム及び研究基盤が、課題終了後も継続して活用されることが重要である。

プログラム名：科学技術連携施策群の効果的・効率的な推進

課題分類： 持続的植物生産のための植物・微生物間相互作用の解析研究

課題番号： 783200002

課題名： 植物・微生物間共生におけるゲノム相互作用

代表者名： 河内 宏

所属機関名：独立行政法人農業生物資源研究所

### コメント

持続的植物生産のため植物・微生物間相互作用をゲノム・分子レベルで総合的に解明する課題として、植物・微生物のゲノムリソースを活用した具体的な研究計画となっている。とりわけ、ゲノム機能解析に関しては世界をリードする実験系を中心に企画されており、国際競争の観点からも十分な準備に基づく戦略的な計画となっている。さらに、研究実績のある研究者により構成され、連携施策群で設定された目標を達成できる可能性が高いものと評価される。本研究で計画されている植物－微生物共生のゲノムレベルでの基礎研究を前進させることにより、非マメ科植物への窒素固定共生系の拡大など、環境を保全しつつ調和のとれた植物生産へ向けた具体的な展望が見出されることを期待したい。